



宮崎大学教育学部附属中学校における  
キャリア教育実践の特質と課題（2） —  
媒体としてのキャリア・パスポート —

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター 公開日: 2021-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鬼塚, 拓, 竹内, 元, 藤本, 将人, 椋木, 香子, Onitsuka, Taku, Mukugi, Kyoko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10458/00010142">http://hdl.handle.net/10458/00010142</a>

# 宮崎大学教育学部附属中学校における キャリア教育実践の特質と課題 (2)

— 媒体としてのキャリア・パスポート —

鬼塚 拓\* 竹内 元\*\* 藤本将人\*\*\* 椋木香子\*\*

**The essence and practical perspective for Career Education: A Case Study of the University of Miyazaki Junior High School attached to Faculty of Education  
— Carrier Passport as a Media —**

**Taku Onitsuka , Gen Takeuchi , Masato Fujimoto , Kyoko Mukugi**

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景と課題

宮崎大学教育学部・大学院教育学研究科では、キャリア教育研究ユニットを構成し、宮崎大学教育学部附属中学校（以下、「宮大附属中」と略記する）のキャリア教育実践についての検討を重ねてきている<sup>1)</sup>。2019年度は、キャリア教育の中核に位置付けられた総合的な学習の時間の実践の特質を、「職場体験学習としての特質」と「探究学習としての特質」という2つの視点から明らかにした。その上で、「中学校でのキャリア教育の重要な要素・ポイント」についての詳細な検討と「キャリア教育を視点とした学校の教育課程全体のカリキュラム改善がどのように推進されるかを明らかにすること」を課題として整理した。本研究は、これらの課題解決を目指した宮大附属中の実践を整理・分析し、特質を抽出した上で、新たな課題を見出し、キャリア教育研究の推進を目指す継続研究である。

2020年度、宮大附属中では、キャリア教育を「学校と社会との接続、子どもたちの『学校から社会への移行』の支援という観点から学校の教育活動の現状を再点検する視点であり、学校改革の視点」<sup>2)</sup>として位置付け、教育課程全体のカリキュラム改善に着手した。このカリキュラム改善には、2020年度より導入が始まった「キャリア・パスポート」<sup>3)</sup>が強く影響している。

宮大附属中では、2018年度から全校生徒を対象とした「ポートフォリオに基づいた生徒による自己評価活動」に取り組んでいた。この活動は、生徒たちが学校生活の中で収集した資料（授業で活用したワークシートや学校行事の振り返りシート等）に基づき、自分の成長を言語化するものであったが、学校から社会への移行を支援するというキャリア教育の目標実現を志向するという側面が弱いという課題があった。換言すれば、キャリア教育の目標ははまだ「マジックワード」<sup>4)</sup>にとどまっており、生徒たちの学校生活との直接的な結びつきが見えにくいものだったのである。

キャリア・パスポートの「様式例」では、「キャリア・パスポートのねらい」とあわせて「育成したい力」が示されている。この「様式例」は、「都道府県教育委員会等、各地域・各学校

\* 宮崎大学教育学部附属中学校 \*\* 宮崎大学大学院教育学研究科 \*\*\* 宮崎大学教育学部

で柔軟にカスタマイズすることを前提とする」<sup>5)</sup> ものである。どのようなカスタマイズをするにせよ、学校の教育活動を実践していくにあたり、キャリア教育の目標を生徒たちや保護者に伝え、キャリア教育の目標に照らしながら生徒たちの成長を認め、支援し、評価していかなければならないことを踏まえれば、「育成したい力」を明示し、伝えることは必要不可欠なことである。キャリア・パスポートの導入には、このことを学校が強く（再）認識するという機能があると言えよう。これは、キャリア・パスポート導入の目的にもあるように、生徒たち自身がキャリア教育の目標に照らしながら、自分自身の成長をメタ認知し、自らのキャリア発達につなげていくことをよりよく実現していく上でも重要な機能であることは言うまでもない。このような意味で、キャリア・パスポートは、「学校（教師）と生徒をつなぐ媒体」であり、かつ「生徒と社会をつなぐ媒体」となりうるのである。

宮大附属中では、これまで実践してきた「ポートフォリオに基づいた生徒による自己評価活動」を「キャリア・パスポート」を軸とする教育活動へ移行させていくことを目指した。そこでは、キャリア教育の目標を見直すことはもちろん、キャリア教育の目標をいかにわかりやすく、そして、年間を通して生徒たちが注意<sup>6)</sup>を向け続け、キャリア教育の目標に照らして自分自身の成長をメタ認知できるようにするかという課題が顕在化したのである。

## 1.2 研究の方法

キャリア教育を実践していくにあたり、キャリア教育の目標をどのように具現化すればよいのか。そして、生徒たちにどのような表現形式で伝え、年間を通して、どのような方法で注意を向け続けることができるようにすればよいのか。

本研究では、この問いについて、記号論の3区分<sup>7)</sup>を参考に、以下のように整理した。

第1に、目標をどのような形式で表現するべきかという、統辞論的問いである。

第2に、目標に使われている言葉と生徒たちの経験の間に、どのような対応関係をもたせるべきかという、意味論的問いである。

第3に、目標に使われている言葉を、生徒たちがどのように使用できる（話したり、書いたり、注意を向けたりできる）ようにするべきかという、実用論的問いである。

これらの問いへの解答を、宮大附属中における具体的な実践に基づいて提出することが、本研究の目的である。

本稿は以下のように論を進める。まず、カリキュラム改善において重要とされる「P D C A サイクルに基づくキャリア教育」に係る先行研究を取り上げ、キャリア教育の目標設定について整理・分析する。次に、その課題解決を目指した宮大附属中におけるキャリア教育実践から、①キャリア教育全体計画の構成、②生徒たちによるメタ認知活動、③教師によるカリキュラムマネジメントの実践という3つの特質を見出す。最後に、新たな課題を見出す。

## 2. 「P D C A サイクルに基づくキャリア教育」の記号論的分析

### 2.1 「P D C A サイクルに基づくキャリア教育」のポイント

立石慎治は、キャリア教育実践においてP D C A サイクルが必要な理由を3つに整理している<sup>8)</sup>。第1に、「キャリア教育が児童生徒の社会的・職業的自立を目指して行われるものである以上、児童生徒を取り巻く社会情勢等の変化に応じて、有効な取り組み、望ましい取り組み

は常に変わりうるから」である。第2に、「キャリア教育にかかわるすべての者に成長・変容や発達があるから」である。第3に、「キャリア教育が特定の教科・時間でのみ行われるものではなく、学校の教育活動全体で進められるものであることから、事前に立てた計画に基づいて取り組まなければ意図的な教育活動として進めることが困難なため」である。

さらに、平成29年度に告示された学習指導要領総則には、「キャリア教育の充実」とともに、「カリキュラム・マネジメント」の必要性が打ち出されている。

それでは、PDCAサイクルに基づくキャリア教育をどのように進めていくべきなのか。藤田晃之は、表1のように、その具体的なポイントを明示している<sup>9)</sup>。

表1 PDCAサイクルに基づくキャリア教育を進めるポイント

ポイント1 「行動レベル」の視点で子どもたちの現状を把握し、目標を設定する
1-A 現状把握は形容詞や形容動詞等の「単語レベル」にとどめない
1-B 目標とスローガンを区別し、具体的な目標を設定する
ポイント2 教職員はもちろん保護者や地域の方々も納得できる現状把握と目標設定にする
ポイント3 現状把握と目標設定において「基礎的・汎用的能力」を活用する
ポイント4 評価指標を設定し、実践の成果（＝児童生徒の成長・変容）を評価する
ポイント5 包括的な評価を工夫する
ポイント6 教科等における評価との混同を避ける
ポイント7 評価結果を踏まえて計画や実践の改善を図る

（藤田晃之（2014）『キャリア教育基礎論』実業之日本社、pp.222-239より筆者作成）

藤田が提示する7つのポイントのなかで、学校におけるキャリア教育の中核となるのは「ポイント1」である。キャリア教育の目標をどのような形式で表現するのかによって、生徒たちへの伝わり方が変わることはもちろん、年間を通したキャリア教育実践の教育的効果にも強い影響を及ぼすことになるからである。

藤田は「ポイント1」について、目標の表現形式として「○○のような場面で○○することができる」「○○の状況において○○と発言できる」「○○について○○という認識がもてる」等々の形式を提案している<sup>10)</sup>。藤田が目標の表現形式を提案するのは、「目標が曖昧であったり、達成の程度の把握が困難な抽象的な表現のままであったりすれば、目標に準拠した評価はなし得ない」<sup>11)</sup> からである。逆を言えば、目標設定が的確になされていれば、「目標自体がすでに評価指標になっている」<sup>12)</sup> と見なすことができるのである。

## 2.2 「キャリア教育の目標」の記号論的分析

藤田が提示した「ポイント1」を、統辞論・意味論・実用論という記号論の3区分を参考に分析する。

第1に、目標の表現形式（統辞論的視角）である。上述のように、藤田は目標の表現形式の例を示している。藤田は「AにおいてBできる」という「文」で表現された形式を採用している。これは「抽象度の高い、文学的・情緒的な傾向が見られる文言」<sup>13)</sup> を改めていくべきだという主張の裏返しでもある。「AにおいてBできる」という形式（「文」）を採用することにより、学校（教師）は目標を具体化する思考を求められよう。しかしながら、目標の表現形式

は「AにおいてBできる」という「文」だけに限定されるものではない。たとえば、品格教育においては「ポスター」の有効性が論じられてきている<sup>14)</sup>。ポスターには、印象的なイラストや写真がデザインされたり、キャッチコピーが書き加えられたりする。目標の表現形式として「文」はもちろん、「ポスター」や「文とポスターの組み合わせ」も考えられよう。キャリア教育実践において、どのような表現形式を採用すべきなのだろうか。

第2に、目標に使われている言葉（記号）と生徒たちの経験との対応関係（意味論的視角）である。生徒たちに目標を伝える場合、抽象的すぎれば「どうすればいいかわからない状態」が生まれ、具体的すぎれば「マニュアル的・ノルマ的な行動が要求される状態」になるだろう。たとえば、「何かをする時、見通しをもって計画的に進めることができる」という目標の場合、「何かをする時」という表現は抽象的すぎるものであるがゆえに、具体的な状況・場面を特定することが困難となろう。この場合、「目標に使われている言葉」と「自分自身の経験」の対応関係が多岐にわたりすぎるため、その対応関係を確定するのは困難となろう。一方で、「登校するときは、8時10分までに教室に入室できる」という目標の場合、この表現は具体的すぎるものであるがゆえに、マニュアル的・ノルマ的なものとなりうる。この場合は、「目標に使われている言葉」と「自分自身の経験」の対応関係が強く限定されることになり、生徒自身の様々な経験を、キャリア教育の目標に照らして発見したり、意味づけたりすることが困難となろう。キャリア教育実践において、どのように目標を語る言葉を選択・創造すべきなのだろうか。そして、生徒はどのように自分自身の経験を目標に照らして意味づけることができるのだろうか。

第3に、生徒たちが目標に使われている言葉をどのように使用できるようにするか（注意を向けることができるようにするか）という実用論的視角である。生徒たちは、いつ、どのような場面で、どのようにキャリア教育の目標に注意を向けることができるか、そしてそのためにはどのような教育実践を行うべきかを問わなければならない。たとえば、生徒たちがキャリア教育の目標について、自分自身の経験と対応付けて話したり、書いたりする場面をどのように創出することができるのか。「質問紙」を用意し、定期的にアンケートを取ることで、生徒たちにキャリア教育の目標を想起させることはできるかもしれない。しかし、それだけで生徒たちの注意が向き続けるようになるとは考えにくい。

以上のように、キャリア教育の目標をどのように表現し（統語論的視角）、その目標に照らして生徒たちが自分自身の経験をどのように意味付け（意味論的視角）、どうすれば学校生活のなかで、年間を通して注意を向け続けることができるようになるのか（実用論的視角）。これはキャリア教育の中核に位置する問いでありながら、その解答はいまだ明らかにはなっていないのである。

### 3. 「キャリア教育全体計画」の構成

#### 3.1 パターン・ランゲージへの着目

キャリア教育の目標を表現し、生徒たちが自分自身の経験を意味付け、目標に注意を向け続けることができるようになるための方法として、パターン・ランゲージに着目する。パターン・ランゲージは、1970年代、建築家クリストファー・アレグザンダーによって考案された。アレグザンダーは、建物や町をつくらうとするときの秘訣を「パターン・ランゲージ」として記述



し、体系化した<sup>15)</sup>。井庭崇は、このパターン・ランゲージのアイデアを「人間活動（学び、教育、プレゼンテーション、コラボレーション、社会変革）」<sup>16)</sup>へ拡大し、様々な分野・領域におけるパターン・ランゲージを開発するとともに、その理論的進展を継続させている<sup>17)</sup>。

井庭は、パターン・ランゲージについて、次のように説明している。

パターン・ランゲージは、実践におけるよりよいやり方の経験則を言語化したものである。よい実践に潜む共通「パターン」を「ランゲージ」（言語）化するため、パターン・ランゲージと呼ばれている。<sup>18)</sup>

パターンは、どのような「状況」（context）でどのような「問題」（problem）が生じやすく、うまく実践している人はそれをどう「解決」（solution）しているのか、そしてその「結果」（consequence）どうなるのかという、「状況」「問題」「解決」「結果」という形式でまとめられており、それに「名前」（パターン名：pattern name）が付けられている。

個々のパターンは、書籍や冊子などで示されるときには、パターン名、パターン・イラスト、状況、問題、解決、結果という形式で記述されるのが基本である。これらのパターンは、一つひとつはその状況における行動をよりよくすることに寄与するが、そのパターン・ランゲージ全体では、その実践の全体の質をよりよくすることができる。<sup>19)</sup>

そして、パターン・ランゲージには3つの機能がある。第1に「認識のメガネ」としての機能である。ある対象を、あるパターンのもとで認識することができるようになる。第2に、「思考のビルディングブロック」としての機能である。パターン・ランゲージを使いながら思考することができるようになる。第3に、「コミュニケーションの語彙」としての機能である。パターンとして表現された言葉を用いながら、他者とコミュニケーションをとることができるようになる。

このような機能をもつパターン・ランゲージに着目することによって、キャリア教育の目標をどのように表現し、生徒たちの経験とどのように関連付け、さらには、生徒たちが注意を向けることができるようになるための手がかりを得ることができる。その理由を、記号論の3区分を参考に整理すると、次のようになる。

第1に、統辞論的視角からは、印象への残りやすさや分かりやすさがある。パターン・ランゲージは「文」だけ表現されているわけではなく、印象に残りやすい「パターン・タイトル」や、そのパターンがまさに実現されつつある様子を描いた「パターン・イラスト」、そして「具体的な場面における行動の方法」がセットになって示されているからである。

第2に、意味論的視角からは、井庭が「中空の言葉」<sup>20)</sup>と表現していることからわかるように、パターン・ランゲージは「具体的な指示でもなく、抽象的なポイントでもな」<sup>21)</sup>い言葉になるようにつくり込まれており、「いろいろな経験がぶら下がるように」<sup>22)</sup>できていることから、様々な経験がパターン・ランゲージのもとで意味づけられるようになっているからである。

第3に、実用論的視角からは、パターン・ランゲージを用いた「経験チャート」<sup>23)</sup>が開発され、パターン・ランゲージが書かれたカードを手に取り、自分の経験との対応関係をメタ認知し、その結果を可視化できるようになっているからである。

### 3.2 「北斗パターン・カード」の創造

宮大附属中では、パターン・ランゲージの方法を取り入れた「北斗パターン・カード」を創造し、全校生徒に配付している。これらの「北斗パターン・カード」は、宮大附属中が「キャリア教育を通して高めたい7つの力」が発揮されたときに生徒たちに期待したい行動を21にまとめたものである（表2）。「キャリア教育を通して高めたい7つの力」に対して、それぞれ3つの「期待したい行動パターン」を対応させて構成している。パターン・ランゲージは「実践におけるよりよいやり方の経験則」を言語化したものである。学校という場におけるよりよい実践、さらには学校から社会へ移行しても、その「よさ」を保つことのできる実践を言語化している。それは決して「マニュアル」や「ノルマ」のようなものではなく、生徒自身がよりよい実践を目指して行動できるようなかたちで示している。「パターン・ランゲージが特に有効なのは、具体的状況が多様に想定されて、一通りの手順を示すマニュアルをつくることができない分野」<sup>24)</sup>だからである。

「北斗パターン・カード」は、本来のパターン・ランゲージの形式を参考にしながら、図1のように、大きく3つの要素から構成している。「パターン・タイトル」「パターン・イラスト」「状況（問題）→解決（結果）」である。

このようなかたちでカード化することによって、パターン・ランゲージの3つの機能を生かすことができるようになる。図1のカードを事例にすれば、「すぐにメモ・すごいメモ」というパターンは、「認識のメガネ」となり、生徒たちのなかにある無数の経験に枠組みを与えるものになる。また、「思考のビルディングブロック」となり、生徒たちが自分の行動を振り返ったり、これからの行動を計画立てたりするときの思考の構成要素となる。さらに、「コミュニケーションの語彙」となり、他者との対話のなかで「すごいメモ・すぐにメモ」という言葉が使用されるようになる。

「北斗パターン・カード」は、名刺サイズのカードに印刷しているため、保管したり、取り出したりしやすく、様々な教育活動に容易に導入することができる<sup>25)</sup>。また、「北斗パターン・カード」を用いたメタ認知活動（後述）に取り組むことによって、年間を通して目に触れ、手に取り、注意を向けることができるようになるのである。



図1 北斗パターン・カード例（筆者作成）

表2 「北斗パターン・カード」の全体

No.	力	タイトル	状況（問題）→解決（結果）
1	やりぬく力	楽しむ トライ&エラー	探究が行き詰まったとき、はじめからやり直しになったときに…トライ&エラー（＝試行錯誤）していること、そのものが探究であることを思い出そう！そして、再びトライ！
2		考えたら やってみよう	「～したい」「～してみたい」と思ったり、書いたりしたときには…実際に学校生活のなかでやってみよう！やってみるからこそ、自分の考えの良さにも気づけるようになるね！
3		私の仕事に こだわりを	自分が所属する団体のなかで活動するときに…自分が任された仕事に、最後まで責任をもって取り組むことはもちろん、こだわりをもって取り組もう！集団のために、みんなのために……。
4	みとおす力	「こまった」を みとおす	他者とともに生活したり、活動したりしているときに…他者が「困りそうなこと」「ガマンしそうなこと」を見通して、自分なりに知恵をふりしぼって考えて、提案したり、行動したりしてみよう。
5		目的と方法を セッティング	いろんな活動に取り組もうとするときに…「この活動の目的は何だろう？」「よりよい方法は？」と考え、それを言葉にしてみよう！目的と方法のセットから物事を始めよう！
6		ホクプラ マスター	日常生活を送るときに…Hokuto planner を使いこなそう！時間割や提出物をメモしたり、1週間の振り返りをしたりしながら、自分の生活を自分の力でコントロールできるようになるう！
7	ふりかえる力	言葉にすると 学びになる	学習したあと、体験したあとには…ふりかえりのための3つの問い（①何があった？ ②それについてどう思った？ ③これからどうする？）に対して、言葉にして答えよう！
8		未来への パスポート	「これ、大事かも！」と直感したときには…すぐにキャリア・パスポートに保管しよう！こうやって少しずつ資料や作品をためることが、自分をつくることにつながっていくんだ！
9		すぐにメモ すごいメモ	誰かが話してる。パツとひらめいた。そんなときには…忘れてしまわないように、すぐにメモを取り出し、書き込もう。この行動が習慣になると、あなたのメモは“すごいメモ”になっている！
10	やくだてる力	視点を見つ ける	いろんな教科の学習をしているときに…「あっ！こういう視点から考えることもできるのか！」「わお！これは物事を考える視点になるぞ！」と、視点を学び、見つけてみよう！
11		視点をつ なげる	いろんな教科の学習をしているときに…「あれ？この視点はあの教科で学んだ視点とつながるぞ（同じだぞ）！」と視点をつなげよう！自分で気づけたら大切な宝物になるね！
12		視点を 役立てる	いろんな教科の学習をしているときに…「あっ！これはあの教科で学んだ視点を使うとうまくいくぞ！」「組み合わせたらうまくいくぞ！」と、視点を課題解決に役立てよう！
13	つくりだす力	ワクワク スイッチ	これから探究活動が始まろうとしているとき、探究活動に取り組んでいるときに…ワクワクした気持ちを全開にして、答えのない問題に自分なりの真理を見つけることに喜びと楽しさを見出そう！
14		ピンタレ スト	情報をキャッチしようとするときに…自分の興味や関心から様々な情報を捉えて、どんな関連付けてみよう。いろんなところに自分の探究を深めるヒントがあるね！
15		話し合い への参画	話し合い活動に取り組むときには…ただ集まるだけ（参加）ではなく、仲間とともにつくる（参画）ための行動をとってこう！あなたの行動で、チーム全体の学びが決まる！
16	ともに ある力	人権の 守り合い	他者とともに生活したり、活動したりしているときに…自分の人権と相手の人権、どちらも守り合い、大切にしよう。「人権」の視点をいつでも・どこでももてる人になろう！
17		E級の 仲間たち	楽しい活動に取り組もうとしているときに…E級の教室に行って交流したり、E級の仲間を呼んで交流したりしてみよう！すぐ近くにいる素敵な仲間と力を合わせて、よりよい活動を！
18		わたし、 語れますよ	E級との交流活動やファミリー活動に取り組んでいるときや取り組んだあとに…交流した仲間の良いところを、まだそれを知らない人たちにどんどん語ろう！「語れる」は「つなげる」になる！
19	こたえる 力	ファミリーの 仲間たち	楽しい活動に取り組もうとしているときに…先輩や後輩と交流しながら力を合わせていこう！そのなかで“先輩らしさ”や“後輩らしさ”を自分たちで見つけていけたら最高だ！
20		リーダー& フォロワー	いろんな活動に取り組んでいるときに…集団を引っ張るリーダーシップと、リーダーを支えるフォロワーシップを使い分けながら、具体的な行動を起こしていこう！
21		宮附を 背負ってます	学校内外で生活しているときに…校内生活では校則を実現するための行動をとろう！校外生活では「宮附」という看板を背負っているという自覚をもった行動をとろう！

（筆者作成）



### 3.3 「2020年度 宮崎大学教育学部附属中学校 キャリア教育全体計画」

「北斗パターン・カード」を組み込んだかたちで、図2のように「2020年度宮崎大学教育学部附属中学校キャリア教育全体計画」（以下「全体計画」と略記する）を構成した。全体計画は、大きく5つの要素から成り立っている。

第1に、「学校経営ビジョン」と「キャリア教育を通して高めたい7つの力（やりぬく力・みとおす力・ふりかえる力・やくだてる力・つくりだす力・ともにある力・こたえる力）」である。全体計画では、「学校経営ビジョン」を「北極星」に、「キャリア教育を通して高めたい7つの力」を「北斗七星」に喩えてデザインしている。日々の教育活動に取り組むなかで、学校経営ビジョンが潜在化してしまうことがしばしばある。それゆえ、いつでも「学校経営ビジョン（北極星）」を見失わないようにするために、「キャリア教育を通して高めたい7つの力（北斗七星）」があるという関係をつくりあげている。また、「北斗」という言葉は、宮大附属中の校歌にも登場するキーワードとなっており、まさに宮大附属中だからこそ構築できるストーリー性を有している。さらに、「キャリア教育を通して高めたい7つの力」は、宮大附属中のこれまでの教育活動から帰納的に導き出したものである。全体計画にあわせて新たに教育活動を創出するのではなく、これまでの教育活動をキャリア教育の視点から見直し、どのような力を育むことができていたか・育むことができるかを議論し、導き出したものである。

第2に、「7つのアクション」と「主な活動」である。ここには、宮大附属中がこれまでに実践してきた教育活動を「探究活動」「教科教育」「道徳教育」「交流活動」「学校行事」「特別活動」「日常生活」という7つのカテゴリーに再整理した。「キャリア教育を通して高めたい7つの力」と「7つのアクション」は一対一関係にあるのではない。あくまでも「7つのアクション」全体を通して、「7つの力」を総合的に高めていくことを意図している。このように、これまでの教育活動を7つのカテゴリーに再整理することで、宮大附属中の教育活動の特質を可視化することができる。

第3に、「私たちの約束」である。「7つのアクション」を通して「7つの力」を総合的に高めていくために、教師が生徒たちに「約束」というかたちで行動宣言を示している。キャリア教育は、学校の教育活動全体を通じて行われるべきものである。各教科や各領域を担当するそれぞれの教師たちがその内容を共通認識するため、宮大附属中では「約束」というかたちで視覚化している。

第4に、「7つの力が発揮されたときに生徒に期待する行動パターン」である。ここに示している21の行動パターンをもとに「北斗パターン・カード」を創造している。「キャリア教育を通して高めたい7つの力」に対して、それぞれ3つずつ「生徒に期待する行動パターン」を関連させている。もちろん、「7つの力」が様々に関連し合うことによって「生徒に期待する行動パターン」が見られることは事実であろう。しかしながら、キャリア教育を通して生徒たちの成長・変容を評価し、生徒たち自身もメタ認知ができるようにするために、このようなかたちで「7つの力」に対して、それぞれ3つずつ「生徒に期待する行動パターン」を関連させている。

第5に、「キャリア教育（将来への準備教育）のためのマインドセット」である。詳細な説明は別稿<sup>26)</sup>に譲るが、このマインドセットは、教師はもちろん、生徒たちに対しても、時機を見ながら説明・指導をしていくことを通じて育んでいくことを目指している。

このように全体計画を構成することによって、宮大附属中が目指すべきキャリア教育のかたちが明確になり、様々な教育実践が全体計画に紐づけられていくことになるのである。

2020年度 宮崎大学教育学部附属中学校 キャリア教育(将来への準備教育) 全体計画

### 学校経営ビジョン

学び合いのなかで  
 <真理を探究し、勤労を愛する、気品のある生徒>の育成を目指し、  
 <北斗のように県内外で活躍できる社会性を育てる学校>を創造する。

常に高く、北斗のように…  
 キャリア教育を通して育てたい  
 7つの資質・能力

こたえる力  
 やくだてる力  
 ともにある力  
 つくりだす力  
 ふりかえる力  
 やりぬく力  
 みとおす力

資質・能力を育む7つのアクション	自分をつくり社会に参画する 探究学習	見方・考え方を働かせる 教科教育	多様な他者との共生を探る 道徳教育	多様な他者との協働を探る 交流活動	見通しと振り返りて学びを生み出す 学校行事	輝く未来へのパスポートをつくる 学級活動	自分に問いかけ自分でこたえる 日常生活
<b>主な活動</b> 総合的な学習の時間 職場体験学習 委員会活動 各教科の授業 我等新聞批評家 朝読書 ICT活用 道徳科授業 PTCC討論会 illuminate of Human Rights 特支との交流 体育大会・橋祭 環境美化活動 読み語り会 宿泊学習 修学旅行 儀式的行事 防災学習 話し合い活動 進路学習 キャリアパスポート 手帳・メモの活用 校則の実現 部活動 朝の会・帰りの会 登下校	<君たちは宮崎のためにどう生きるか>をコンセプトに、学びの集大成の場として位置付ける。 仕事を探究していくことを通して、自分自身の創造と社会への参画を探究できるようにする。	各教科の見方・考え方を働かせながら、問題について粘り強く考え抜くことができるようにする。 各教科の見方・考え方を可視化し、教師間/教師・生徒間で共有できるようにする。	マイノリティの視点に立ちながら、多様な他者との共生の在り方を探究できるようにする。 道徳的な問題に対して、当事者性をもって(自分事として)考えることができるようにする。	特別支援学級と通常学級の交流活動を通して、協働の在り方を探究できるようにする。 異学年集団による活動を通して、先輩や後輩としての在り方を探究できるようにする。	学校行事の目的や目標の実現に向けて、見通しをもって取り組めるようにする。 振り返り活動を通して、学校行事を生徒それぞれが意義づけ、学びを得られるようにする。	自分の成長の証となるポートフォリオを活用し、自分自身や未来について探究できるようにする。 委員会活動を中核とした集団づくりに、他者と協働しながら参画することができるようにする。	自分自身に問いかけ、自分でこたえることで、適切な行動を選択できるようにする。 学習したことを日常生活の様々な場面で実践につなげることができるようにする。
<b>私たちの約束</b> 生徒が探究の楽しさを実感し、探究に没頭するために… よりよく探究するための方法を探究したり、生徒と学校外の人材を結び付けたりします。	生徒が各教科で学ぶ見方・考え方に注意を向けるために… 各教科の見方・考え方を働かせて課題を解決する授業の在り方を研究し続けます。	生徒が自分研究を進めることができるようにするために… 生徒の困りごと(潜在的ニーズ)を探り、それを満たすような工夫をします。	生徒が多様な他者と協働して活動できるようにするために… すぐ近くにいる、頼りになる味方に、遠慮することなく、どしどし応援を要請します。	生徒が学校行事から多くのことを学べるようにするために… 全体を俯瞰しつつ、「今、ここ」での生徒たちの活動にエネルギーを注ぎます。	学校生活のあらゆる場で学んだことを自分に活かすために… 学びを散らかさず、無駄にせず、蓄積していけるような声掛けを継続しましょう。	気品を保った行動が習慣となっていくようにするために… 「今、ここ」で注がれている期待をメッセージとして伝え続けましょう。	
<b>生徒に期待する行動パターン</b> 活き活きとした表情や身体活動で探究活動に取り組むことができる。	各教科の特色ある視点を学んだり、見つけたりすることができる。	他者の困りごとを見通し、解消する行動をとることができる。	通常学級と支援学級の壁を飛び越え、仲間と関わるることができる。	目的と方法を念頭に置きながら、活動をやり抜くことができる。	キャリア・パスポートを活用して自分の成長を確かめることができる。	宮大附属中の生徒として期待されている行動をとることができる。	
	様々な情報を自分の問題関心に引きつけて取り入れ、再構成できている。	教科の枠を越えて視点のつながりを見つけている。	「道徳で考えたこと」や「人権宣言」を行動に移そうとすることができている。	強いリーダーシップやフォロワーシップで集団に関わる事ができている。	学級の課題解決のために自分の役割を果たすための行動ができている。	話し合い活動に参画し、メンバーとともに新たな知をつくる事ができている。	
	試行錯誤を繰り返すことを前向きに捉え、それこそが探究の醍醐味であることを実感できている。	各教科で学んだ様々な視点を課題解決の場面において役立てることができている。	お互いの人権を大切にするという視点から物事を考え、行動しようとする事ができている。	振り返りを大事にし、行事から学んだことを言語化し、日常生活に活かす事ができている。	話を聴きながらメモをとったり、気づいたことをメモしたりすることができている。	Hokuto planner(手帳)を活用しながら自分の生活をコントロールすることができている。	

### キャリア教育(将来への準備教育)のためのマインドセット <ラッキーナスビ2.5>

<b>&lt;計画的偶発性&gt;を視野に入れよう</b> たまたまめぐりあった人や情報、学びが、自分の人生を大きく変える幸運(ラッキー)へと変わる。あらゆる教育資源を最大限に活用し、幸運(ラッキー)をたくさん呼び込もうとする構えを求めよう。	<b>&lt;ナスビの売り方&gt;を問い続けよう</b> 「我等の目標」を実現するための方法を<ナスビの売り方>と呼ぼう。様々な教育活動において、「生徒たちはどのような<ナスビの売り方>を学び得るか?」を常に問い、考え、実践し続けよう。	<b>&lt;モチベーション3.0&gt;を求め続けよう</b> 「評価されるからやる」という<モチベーション2.0>を認めつつ、「もっと学びたいからやる」「成長したいからやる」という自発的・内発的な動機<モチベーション3.0>を求めていこう。
--	--	---

図2 2020年度 宮崎大学教育学部附属中学校 キャリア教育全体計画 (筆者作成)

### 4. 生徒たちによるメタ認知活動


#### 4.1 キャリア・パスポートの形式

宮大附属中では、キャリア教育の目標を、パターン・ランゲージの方法を用いて「北斗パターン・カード」として表現することで、生徒たちが自分自身の経験を整理したり、これからの学習に見通しをもったりすることができるようになるとともに、年間を通してキャリア教育の目標に注意を向けることができるようになることを企図している。キャリア・パスポートは、そのための有効な媒体として機能する。

宮大附属中では、「ポケットファイル」をキャリア・パスポートとして位置付け、自分の成長に役立つ資料をポケットファイルに収集・保管していくようにしている<sup>27)</sup>。このキャリア・パスポートの表紙・裏表紙には、「キャリア・パスポートの意義」と「キャリア教育を通して高めたい7つの力」及び「北斗パターン・カードの一覧表」がプリントされ、保管されている。

#### 4.2 自己成長レポートの形式

宮大附属中では、キャリア・パスポートや北斗パターン・カードを活用した「自己成長レポート」を、年間4回（5月・7月・11月・2月）作成する。「質問紙」によるアンケート調査ではなく、生徒たちがキャリア・パスポートや北斗パターン・カードをもとに、自分自身の成長をメタ認知するとともに、これからの成長の方向性を見通すのである。「自己成長レポート」の形式は、図3に示す通りである。



照らそう！私の成長を！ 自分のキャリアを切り拓く自己成長レポート (2020.7)

## HIGHLIGHT OF GROW-UP MYSELF 2020.7

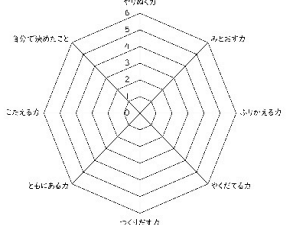
宮崎大学教育学部附属中学校 年 級 番

② <ハイライトキャンパス>を使って、これまでの自分をふりかえってみよう！

No.	資料のタイトル	私の成長～私ができるようになったこと～	検索
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			
16			
17			
18			
19			
20			
21			
22			
23			
24			
25			
26			

① <北斗パターン・カード>を使って、これまでの自分をふりかえってみよう！

高めたい力	カード	枚数	合計	具体的な行動記録
やりぬく力	12 決しむついでんら			
	13 考えながらやってみよう			
	14 私の仕事に役にたつ			
ふかす力	15 「こまっ」をみどむ			
	16 目標を達成させるステップ			
	17 ホタテマスタ			
ふりかえる力	18 言葉にできる学びになる			
	19 先輩へのパスポート			
	20 学びの振り返りシート			
やくだてる力	21 拠点を身につける			
	22 拠点を活用する			
	23 拠点を活用する			
	24 リンクアシイ			
つくりだす力	25 ビンクア			
	26 話し合いの姿勢			
とらぬる力	27 人権の守りあい			
	28 しんげいの仲間たち			
	29 わたし、読ませよう			
いたえる力	30 フォトリーの特長なら			
	31 リーダーシップのつくり			
	32 協力を得よう			
自分で決めること	33			
	34			
	35			



③ 5月から7月までの3か月、パターン・カードに記された行動をどれくらい行っていたかをグラフで実施している<>少し実施している<>実施していない<>の3つに分けてふりかえってみよう。

④ <実施している<>少し実施している<>に付いたカードについて、具体的にどのような行動をしたのかを自分で振り返り、記入しよう。記入は【今振り返る内容】では「この経験で学んだこと」という観点で記入しよう。

⑤ 上の表を眺めながら、<実施している<>と<少し実施している<>と<実施していない<>の3つで順位をつけてみよう。マックスシートに記入しよう。そして、順位表を元に、リーダーボードを作ってみよう。リーダーボードに記入するために決してみよう。

図3 「自己成長レポート」(筆者作成)



「自己成長レポート」は、大きく5つの要素から構成している。

第1に、北斗パターン・カードを用いた自己評価の可視化である。生徒たちは、机上に「実践している」「少し実践している」「実践していない」と書かれた3枚のカードを机の上に置く。そして、北斗パターン・カードを1枚ずつ眺め、経験を振り返り、3枚のいずれかのカードの上に配置していく。「実践している」を2点、「少し実践している」を1点、「実践していない」を0点としてカウントし、合計を算出し、レーダーチャートを作成する<sup>28)</sup>。これによって、「キャリア教育を通して高めたい7つの力」を視点とした自己分析が可能となる。

第2に、「具体的な行動記録」の記述である。たとえば、「やくだてる力」には「視点を見つける」「視点をつなげる」「視点を役立てる」という3つの行動パターンが位置づいている。これらの行動パターンについて、「実践している」あるいは「少し実践している」と自己評価した場合、その具体的な根拠を記述する。これによって、経験が明確に整理されていく。

第3に、キャリア・パスポート（宮大附属中では「ハイライトキャンパス」と呼称している）に保管した資料の目次づくりである。これによって、自分がどのような資料を保管していたのかを確認することはもちろん、どのような興味・関心を抱いているのかをメタ認知することにもつながる。

第4に、キャリア・パスポートに保管した資料等を根拠としながら、自分の成長を箇条書きで、できるだけたくさん書き出すことである。自分ができるようになったことを書き出すことによって、自分の成長をより自覚することができるようになる。

第5に、3か月を振り返るとともに、次の3か月への見通しを記述するまとめである。このような「自己成長レポート」を3か月ごとに書きためていくことによって、生徒たちは自分の成長を自分の言葉で表現し、メタ認知することができるようになる。そして、キャリア教育の目標が可視化された「北斗パターン・カード」への注意が、年間を通して向くようになるのである。

### 4.3 フィードバック

生徒たちが作成した「自己成長レポート」は、キャリア・パスポートに保管していく。キャリア・パスポートには、教師や保護者には対話的な関わりが求められるが、宮大附属中では「対話的な関わり」をフィードバックとして位置付け、大きく2つの実践に取り組んでいる。

第1の実践は「通知表所見欄を活用したフィードバック」である。生徒が作成した「自己成長レポート」をもとに、以下のような形式で所見を書くのである<sup>29)</sup>。これによって、生徒はもちろん、保護者に対しても確実に学校での成長を伝えることができる。

表3 通知表所見欄を活用したフィードバック

項目	所見文例
引用する	今学期、「将来の夢を考えるようになったこと」「手帳を使ってスケジュールを確認できるようになったこと」「宅習を自分のペースで行えるようになったこと」を自分自身の成長として挙げています。
認める	その中でも、特に「手帳を使ったスケジュール確認」については、非常に積極的に取り組むことができていました。手帳コンクールでは学級の代表にも選ばれ、模範となりました。
気づかせる	〇〇さんの成長はこれだけではありません。係活動の仕事にも積極的に取り組み、学級の掲示板はいつも鮮やかに彩られていました。みんなにこまめに声を掛ける姿は、リーダーの姿そのものでした。
励ます	これからがんばりたいこととして「将来の夢を具体的に考えていくこと」を挙げています。2学期は立志式もあります。学校の授業や行事を通して、自分のキャリアについて考える機会を大切にしましょう。

(筆者作成)



第2の実践は「保護者を交えた三者相談でのフィードバック」である。宮大附属中では、夏季休業を利用して三者相談を行っている。本年度、第1学年を対象に、生徒が主体となった三者相談<sup>30)</sup>を実施した。生徒たちは「自己成長レポート」をもとに、中学校入学から現在までの自分の成長を、教師及び保護者にプレゼンテーションした。プレゼンテーションのストーリーは、①中学校に入学したばかりの私→②中学校での印象的な出来事→③中学校での成長→④これからがんばりたいこと、という構成となっている<sup>31)</sup>。プレゼンテーション後、教師及び保護者から生徒に対してフィードバックが与えられる。このとき作成したプレゼンテーションは、「自己成長レポート」とともにキャリア・パスポートに保管されている。

## 5. カリキュラムマネジメント実践

### 5.1 サーベイ・フィードバックを用いた職員研修

生徒たちが自己評価をもとに作成した「自己成長レポート」をもとに、職員研修においてカリキュラムマネジメント実践に取り組む。生徒たちの自己評価をもとに、教師も過去3か月の教育実践を振り返り、次の3か月に向けた行動計画（アクションプラン）を創造するのである。このように、「生徒の自己評価」と「教師の自己評価・行動計画（アクションプラン）の策定」を、年間を通して繰り返していくことによって、学校の教育課程全体のカリキュラム改善に取り組んでいる。

職員研修では、サーベイ・フィードバックという方法を採用している。サーベイ・フィードバックとは「組織で行われたサーベイ（組織調査）を通じて得られた『データ』を、現場のメンバーに自分たちの姿を映し出す『鏡』のように返して（フィードバックして）、それによってチームでの対話を生み出し、自分たちのチームの未来を決めてもらう技術」<sup>32)</sup>として定義される。

サーベイ・フィードバックは、3つのステップを踏みながら進められる<sup>33)</sup>。第1のステップは「見える化」である。生徒たちの自己評価は「7つの力」と「21の行動パターン」それぞれにグラフ化している（図4）。次に、第2のステップは「ガチ対話」である。見える化した生徒たちの自己評価に職員全員で向き合い、様々に対話を行う。データが上下している要因を探ったり、データの上下をいかに解釈するべきかを議論したりする。そして、第3のステップは「未来づくり」である。これから自分はどのようにするのか、自分たちの学年はどのようにするのか、自分たちの校務はどのようにするのかを考え、行動宣言（アクションプラン）を創造するのである。その際には、具体的で実現可能なものとするため、「積極的に」「もっと」「コミュニケーション」「見守る・見届ける」といった言葉を

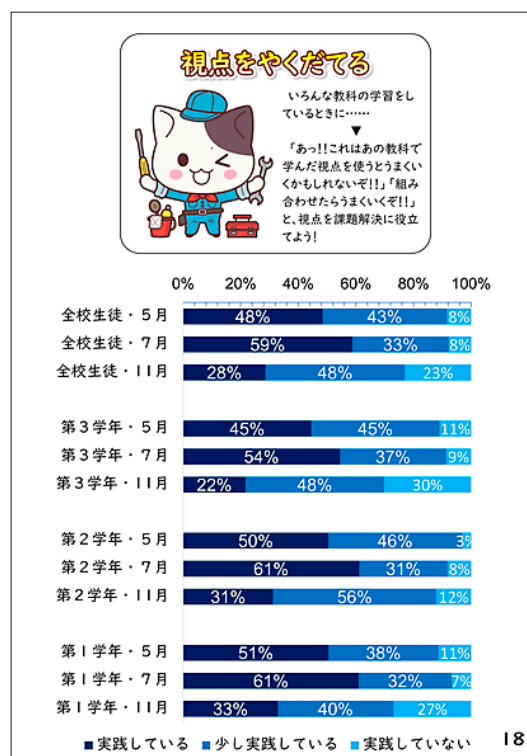


図4 自己評価の見える化（筆者作成）

使わないように配慮している<sup>34)</sup>。創造した行動宣言（アクションプラン）は、生徒たちの目に触れる場所に掲示したり、キャリア教育通信で公開したりしている。

## 5.2 行動宣言（アクションプラン）の事例

行動宣言（アクションプラン）は、大きく3つの視点から創造する。

第1に、自分が担当する教科における教育実践の創造である。教科教育を通じて、「北斗パターン・カード」のどの部分に、どのようにアプローチしていくのかを考える。

第2に、自分が担当する学級・学年における教育実践の創造である。学級担任は自分が担当している学級において、副担任は学年全体において、「北斗パターン・カード」のどの部分に、どのようにアプローチしていくのかを考える。さらに、学年全体で共通して取り組む教育実践も創造する。

第3に、自分が担当する校務分掌における教育実践の創造である。各自が担当する校務における教育実践とともに、校務全体で共通して取り組む教育実践も創造する。

2020年11月の職員研修では、表4のような行動宣言（アクションプラン）が創造された。

表4 2020年11月から3月までの行動宣言（アクションプラン）

No.	チーム	行動宣言（アクションプラン）
1	第1学年	(1) 教科・クラスで、キャリア・パスポートに保管したほうがよい書類があれば確実に生徒に伝える。 (2) 校則が守られているかについて意識調査を行い、その結果をまとめて生徒に掲示すると共に、教師はそれを用いて生徒に話をする。校則やルールについて、守られていない場面があれば、これまでよりも毅然とした態度で言語化し指導する。なお、これらの取り組みを劇的ピフォーアフターと称する。 (3) 朝の会や帰りの会で、人権、仲間、交流、リーダー・フォロワー、宮附という看板等、「ともにある力」や「こたえる力」に係るキーワードに関する話をする。話の内容については、学年職員が持ち寄り、お互いに共有する。1週間に少なくとも2回は朝の会か帰りの会で話をする。なお、この取組をハートフルタイムと称する。
2	第2学年	宮附を背負える3年生になれるように、授業や行事、学年及び学級での活動の中に、生徒が主体的に活躍する場面を意図的に設定し、自己有用感を高めながら自信をつけさせていく。
3	第3学年	語り・振り返り・ファミリー集会 自分のことを語ったり、相手のことを聞いたり、生徒自身の想いを語る集会。また、最高学年として誇りと自信をもち、後輩にそういった姿を見せ、普段から見られていることを自覚させる。
4	教務部	(1) 「みとおす力」を伸ばすために、モグモグタイムの時間を、帰りの会前に10分間とり、全生徒が確実に取り組めるようにします。 (2) 「みとおす力」に関連して、モグモグタイムの後、月行事を必ずHPにアップします。 (3) 「リーダー&フォロワー」「ともにある力」を伸ばすために、生徒会メンバーが語る姿や表彰の様子を、スタジオ or ステージから、生放送できるように機材等を設備します。
5	研究部	すべての見方・考え方を見える化します。 (1) 会議室に「視点ポケット」を設置する。 (2) 各教科・領域等で生徒が学んだ視点をカードに書き込み、ポケットに入れる。 (3) 全職員で「300枚制覇」を目指す。 (4) 来年度のカリキュラムを創造する。
6	生徒指導部	生徒会活動において“リーダー&フォロワー”の意識付けを行います！
7	保健安全部	(1) 『GO TO MF-SDGs』“私の仕事にこだわりを”もって活動に取り組めるように、保体委員会を動かします。MF-SDGsの個人評価表を作成し、毎月振り返りを行うことで、生徒の感染症対策の意識変容を見える化します。結果を保体委員会の生徒と分析し、具体的な対策を検討・実践します。 (2) 『みるくちゃんといっしょ』もうもうルームを“こまったをみとおす”きっかけづくりに利用できるようにします。もうもうルームでの異学年や大学生との交流を深められるようにサイコロトークを取り入れ、困り感を伝えやすくする工夫を行うことで、みんなで“困った”を助け合えるようになるための橋渡しを行います。

(筆者作成)

## 6. おわりに

本研究では、2019年度からの継続研究として、宮大附属中のキャリア教育実践から、①キャリア教育全体計画の構成、②生徒たちによるメタ認知活動、③教師によるカリキュラムマネジメントの実践という3つの特質を抽出した。これらの特質は、2020年度から導入が始まったキャリア・パスポートの機能、すなわち「学校（教師）がキャリア教育の目標を生徒たちや保護者に分かりやすく伝えることを（再）認識する機能」及び「生徒たちが自分自身の成長をメタ認知する機能」が強く影響を与えたものとなっている。

本研究は、キャリア教育を視点とした学校の教育課程全体のカリキュラムマネジメントの事例研究という側面も有している。今後は、宮大附属中の実践をもとに、キャリア教育を視点としたカリキュラムマネジメントの方法論の確立が求められよう。

## 注

- 1) 鬼塚拓・竹内元・藤本将人・盛満弥生・小林博典・安影亜紀・山下辰弥・椋木香子（2020）「宮崎大学教育学部附属中学校におけるキャリア教育実践の特質と課題」宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター『研究紀要』28、pp.31-46。
- 2) 児美川孝一郎（2007）『権利としてのキャリア教育』明石書店、p.73。
- 3) 2019年3月29日、文部科学省初等中等教育局児童生徒課から事務連絡「『キャリア・パスポート』の様式例と指導上の留意事項」が発出されており、そのなかで「キャリア・パスポート」は次のように定義されている。「児童生徒が、小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について、特別活動の学級活動及びホームルーム活動を中心として、各教科等と往還し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオのことである。なお、その記述や自己評価の指導にあたっては、教師が対話的に関わり、児童生徒一人一人の目標修正などの改善を支援し、個性を伸ばす指導へとつなげながら、学校、家庭及び地域における学びを自己のキャリア形成に生かそうとする態度を養うよう努めなければならない。」  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/career/detail/1419917.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/detail/1419917.htm)（2021年1月6日最終閲覧）
- 4) 広田照之は「それを言われると、誰もが納得するか、納得したふりをせざるをえなくなる」言葉を「マジック・ワード」として分析している（広田照之（2011）『教育論議の作法－教育の日常を懐疑的に読み解く』時事通信社、pp.2-4、参照）。
- 5) 文部科学省初等中等教育局児童生徒課（2019）同上。
- 6) ここで「注意」とは、山鳥重による次のような論考を念頭に置いている。「見方を変えますと、注意とは、自分が選択した対象（心像や思い）をよりよく、より強く捉えようとするところの働きです。対象と言っても、どの心像もすべて自分のところの中の出来事なのですが、その中のどれかをさらにより強く、より明晰に経験しようとする働きです。同時に対象心像とその周辺を構成する心像群との関係をはっきりさせようとする働きです。」山鳥重（2018）『「気づく」とはどういうことか－ところと神経の科学』筑摩書房、pp.164-165。
- 7) 池上嘉彦（1984）『記号論への招待』岩波書店、参照。ここでの「記号論の3区分」とは、統辞論・意味論・実用論である。統辞論とは、記号と記号の結合関係を問う視角である。意味論とは、記号と記号が指示する意味を問う視角である。実用論とは、記号とその使用者との関係を問う視角である。
- 8) 立石慎治（2018）「PDCAサイクルに基づくキャリア教育実践の在り方」藤田晃之編著『キャリア教育』ミネルヴァ書房、p.89。
- 9) 藤田晃之（2014）『キャリア教育基礎論』実業之日本社、pp.222-239、参照。
- 10) 同上、pp.226-227。
- 11) 同上、p.225。

- 12) 同上、pp.232-233。
- 13) 同上、p.226。
- 14) 青木多寿子編著（2011）『もう一つの教育－よい行為の習慣をつくる品格教育の提案』ナカニシヤ出版、参照。
- 15) クリストファー・アレグザンダー（1993）『時を超えた建設の道』鹿島出版会、参照。
- 16) 井庭崇・古川園智樹（2013）「創造社会を支えるメディアとしてのパターン・ランゲージ」科学技術振興機構『情報管理』55（12）、p.870、参照。
- 17) 井庭崇（2019）『クリエイティブ・ラーニング－創造社会の学びと教育』慶応義塾大学出版会、参照。
- 18) 同上、p.161。
- 19) 同上、pp.163-165。
- 20) 井庭（2019）、p.594。
- 21) 井庭（2019）、p.594。
- 22) 井庭（2019）、p.430。
- 23) 井庭（2019）、p.296、参照。
- 24) 井庭（2019）、p.271。
- 25) 第1学年社会科では、社会的な見方・考え方を、パターン・ランゲージの方法を用いてカード化し、活用する学習を行っている。鬼塚拓（2020）「社会科授業におけるパターン・ランゲージの可能性」宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター『研究紀要』28、pp.79-93、参照。また、他教科・他学年においても、パターン・ランゲージの方法を用いた実践が蓄積されつつある。それらの実践は、『令和2年度宮崎大学教育学部附属中学校研究紀要みらいづくりはじめました』を通して公開している。
- 26) 鬼塚拓・竹内元・藤本将人・盛満弥生・小林博典・安影亜紀・山下辰弥・椋木香子（2020）、参照。
- 27) 鈴木敏恵（2017）『AI時代の教育と評価』教育出版、pp.115-148、参照。
- 28) レーダーチャートを使って可視化する実践は、井庭崇氏による研究及び実践に倣ったものである。井庭（2019）第1章、参照。
- 29) 通知表所見の形式は「ジョハリの窓」を意識したものである。特に「気づかせる」の局面では、生徒本人が知らない「自分の良さ」を、教師から積極的に知らせていくことを通して、生徒の自己理解を促進しようとする意図がある。「ジョハリの窓」については、中原淳・中村和彦（2018）『組織開発の探究』ダイヤモンド社、pp.158-159を参照した。
- 30) 生徒が主役となる三者相談は、日本キャリア教育学会第41回研究大会（長崎大会）における自由研究発表（稲垣久美子「生徒が仕切る三者相談－スウェーデンでの『学ぶことを学ぶ』教育実践事例」）から示唆を得たものである。
- 31) ストーリー構成については、川上徹也（2019）『売らない売り方』日本経済新聞出版社、p.57、参照。
- 32) 中原淳（2020）『サーベイ・フィードバック』PHP研究所、p.26。
- 33) 同上、p.27。
- 34) 永谷研一（2015）『絶対に行動定着させる技術』ProFuture、参照。